

---

# 青き英雄と異世界譚

波歩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青き英雄と異世界譚

### 【コード】

N0102X

### 【作者名】

波歩

### 【あらすじ】

いきなりタイトル変えました。ごめんなさい

かつてない最悪の被害をもたらしたイレギュラー戦争。それを終結させた英雄の1人エックスはある事情により自らの体を失ったあと、サイバー空間で世界を見守っていた。そんなある日彼は不思議な物を見つけ…

ロックマンゼロシリーズのエックスとリリカルなのはA・Sとのクロスオーバーです。原作無視や独自解釈、都合のいい設定など多々ありますのでご注意を。

## 第0話

あらゆる情報が流れる場所、サイバー空間。

そこはサイバーエルフと呼ばれる生命体やレプリロイドの魂が存在する電子の世界。

おそらく現在誰にもその存在を知られていないであろうその空間に彼は居た。

「 此処もまだ特に問題はない、か」

そう呟いて息を吐くのはどこか神父のような雰囲気の中性的な整った顔立ちの青年、もといサイバーエルフ。

その青年こそ、彼の蒼き救世主とも呼ばれた伝説の英雄エックスだった。

ある事情により自らの体を犠牲にして実体の体を無くしてからというもののこの空間に留まり、元い世界を見守っていた。

それでもまた、世界や自分の親友の危機は見過ごせないのが彼の性格である。これまでも何度か歪んだ正義に立ち向かう親友を影から支えていた。

それでもまだ物足りないのか、親友に少しだけ休むと言いながらこうしてこの場所の見回りを定期的に行っていたのだが、

「 此処で問題が起こることなんてない、か…。」

前述した通り、此処は現在普通の世界からは誰にも認識されておらず（それでも、一部の科学者達の間で此処の存在はまことしやかに

囁かれているらしい）、サイバー空間の外から問題がやって来るとはまずない。

しいて此処で発生する問題と云えば、サイバーエルフ同士の喧嘩や、此処に来たばかりのレプリロイドが時々酷く混乱状態に陥っていることくらいで、それは大抵本人達の勘違いであつたり、そうでなくとも今のエックスの力で容易く解決できるものである。

つまりこの場所、此の世界は至極平和であるということ。

「平和であることを喜ぶべきなんだろうけど……」

エックスは内心心苦しかった。いくら100年近くたった独りで戦つたとはいえ、世界を守つてほしいと一方的に頼んでしまつたような気がして、心優しい性格の彼はこの事について大いに悩んでいた。実際、親友は特に文句も言わず了承したにもかかわらず。

「…そう思い悩まずに、エックス様。」

ふと横を見ると、見回りを頼んだ自分の部下のようなものであり、元ネオ・アルカディア四天王隠将ファントムがいた。

「突然失礼いたしました。しかしエックス様の御気分が何処か優れない物と見受けられた故。」

「…ありがとうございます。でも、僕は大丈夫だから…」

「世界の行く末に関われないことを気に病んでいらつしやるのですか？」

「…」

「あなた様は過去にあの忌まわしい戦争を終結へと導いた方。途方もなく戦い続けたのですから、今此処で休息をとっていても当たり前のことです。もっと御身を大切になさって下さい。」

「…そうだね。考えておくよ。心配させてすまない、ファントム」

「滅相もございません。我が喜びは我が主の御健勝。そのような言葉をおっしゃってもらえること、有り難き幸せ」

「ふふ…相変わらずだね、君は」

そう言って微笑む英雄とその様子を見て何処か満足げな表情の隠将。

今日のサイバー空間での出来事的一幕であった。

第0話（後書き）

駄文な上話が進みませんorz

## 第1話

「これは・・・何だ？」

ある日エックスが何時もの日課である見回りをしていると、とある情報の中に光を放つ綻びのような物を見つけた。

サイバー空間はある意味情報の羅列によって成り立っており、こういった綻びやバグが生じることは珍しくない。

しかし、大抵の物はすぐに正常化するか近くにいるサイバーエルフによって削除されるのだが、この綻びは通常の物に比べて巨大なものでないにも関わらずその場に健在していた。

周囲のサイバーエルフに話を聞いても要領を得ず、曰く

「女の子の音がする」

「何か寂しそうに呼びかけてくる」

等と駆けつけたばかりのエックスには意味が分からない。

「・・・何処かからの救難信号が此処に紛れ込んでしまったのか？」

だとすればすぐに元の世界に戻しておかなくては。

そう思いエックスがその綻びに手を伸ばし解析しようとする、

「！」

突如此方に向かって綻びから光が迫る、と同時にエックスは自分の体が引つ張られる感覚を覚える。

「くっ……!」

このまま綻びに引き込まれたらどうなるかわからない。そう思っていたとき、

「滅ッ!!」

念のため、とエックスの背後で警戒していたファントムの十字手裏剣によって、エックスに向かっていった光は退けられた。

「ファントム!」

「お下がりくださいエックス様」

ファントムは綻びの前に歩いていき、

「我が主を引きずり込まんとする悪しき歪みよ、我が刃にて滅するがよい……!」

と綻びに苦無を振り下ろそうとしたとき、

……誰か……

「!!」 待ってくれファントム!それを壊しては駄目だ!」

突如頭の中に流れ込むように聞こえてきた少女の声に、エックスは思わず叫んでいた。

その様子に驚きながらもファントムは苦無を持つ手を下ろす。

「……いかなされました、エックス様……？」

「……君には今の声が聞こえなかったのかい……？」

「声……？声とは一体……？」

「え？」

いや、たしかに聞こえたはずだ、エックスは周りのサイバーエルフにも確認するが、誰一人その少女の声を聞いたという者はいない。

声を聞いたといっても、サイバーエルフからすれば聞いたというより”感じた”という方が近いようで、細かく何と言ったかまでは聞き取れなかったそうだが……。

「エックス様……あの綻びは危険です。早急に消滅させるべきではないかと」

「……でも、綻びから悪意や畏の気配は感じられなかった。さつき僕を引き込もうとしたときにも引きずり込むというより、助けを求めようなかんじだったんだ……」

「左様で、ございますか」

声を聞いたこととその内容を伝えても、何処か納得のいかない顔のファントムだが、エックスはどう言われようとこの綻びは邪悪な物

でないと思っていた。

それに、誰かが綻びから助けを求めている、その声を無視できない自分がいた。

「お言葉ですがエックス様、あの綻びの中に入るといふのは非常に危険です。主が危険な目に遭うのを見過ごす訳にはいきません」

顔つきから気づいたのかファントムが釘を刺す、が

「・・・それでも、僕は誰かが助けを求めているのを見過ごすことなんて、できない」

その揺るぎ無い目を見て、ファントムはもう、自分の主を止めることはできないと悟った。

「承知、いたしました・・・。しかし、主だけを危険に晒すのは我が一生の恥。このファントムお供いたし「すまないが一人でいかせてもらうよ、ファントム」エックス様！しかし・・・」

加勢しようとしたファントムだが、エックスによって遮られる。

「それに、ここから僕達二人が同時にいなくなってしまうってはこの場所を守る者がいなくなってしまう。それは君にだって分かるだろう？だから、僕一人で行かなくてはならないんだ」

「エックス様・・・」

「すまない、ファントム・・・」

自分が綻びに向かつても例の少女の声が聞こえなかった自分には何もできないという事を、ファントムは理解していた。

「・・・分かりましたエックス様、このファントム、主無きこの場所を必ずや守りきってみせましょう」

「ああ。頼む、ファントム」

「ですがエックス様、どうか無理だけはなさらないよう・・・」

「分かってる・・・、ファントム」

そしてエックスは念のために、と言われ過去に使った武装のデータと親友の得物の”コピー”を携え、

「それじゃあ、行ってくる。あとは任せたよファントム」

「御意」

眩い光を放つ綻びへと、その身を任せた。

・・・エックス様、御武運を

・・・がんばってね、エックス！

自分を見送るファントムの声やその場に居たサイバーエルフ達の応援する声を聞きつつ、エックスの意識は溶けるように無くなった。

-  
-

かくして、青き英雄は声の主が居る異世界へと導かれていく・・・  
果たして英雄は、異なる世界にて、どんな物語を紡ぐのだろうか・・・

## 第1話（後書き）

次回からようやくなのは世界と絡んでいきます。

とは言っても予定のめどが立ってないので更新できるか不安ですが、がんばります・・・

## 第2話（前書き）

遅れてすみません！テスト期間がつらいです・・・

そして歪な関西弁に注意

## 第2話

「誰か家族にでもなっしてくれへんかなあ」

そんな普通叶わないであろう願望を独り呟くのは車椅子に乗った少女、八神はやて。

もちろん自分の願い事を実際に口にしたからといってそれが現実になる訳でもなく

「あーアカンアカン！弱音ゆうたって何も変わらへん！」

と、先程の自分の発言をすぐに否定する。

それでも普段のはやての生活環境を鑑みれば、たとえ幼い少女でなくとも弱音を吐きたくなるものである。

現在八神家に住んでいるのは実質はやてただ1人のようなもので、もちろん定期的にやって来るヘルパーが彼女だけでは困難な家事を手伝うことこそあるが、飽くまでもそれは一時的な物であり、決して家族が増えるのではない。

足の検診の為外出する時に、送り出してくれる人は居ない

家に帰ってきた時に帰りを迎え、優しく声をかけてくれる人もいない

賑やかに会話を交わしながら夕食を共にする人もいない

はやては、この家で1人だった。

あるとすれば何処からか振り込まれる差出人不明の生活費であり、おかげで日々の暮らしには困らないものの先の望みが満たされる訳ではなかった

勿論、近所に住む人達にはいつも親切にしてもらっていることははやてからしてもありがたかったし、感謝もしている。

それでも今の自分に明確に家族と呼べる存在はおらず、常に孤独を感じていた。

そんな現実にもめげず、今日もはやては1日分の出来るだけの家事を終え我が家の庭が見える窓から、車椅子に座って夜空を眺めていた。すると、

「あつ流れ星！」

突然空に一筋の流れ星が落ちてきた。久しぶりにこれを見たはやては折角だからと先程自分で否定した願いを口にする。

「どうか私に家族が出来ますように…」

それは本来3回繰り返すのが正しいのだろうが、本人は願い事を言っただけで満足しようで、

「さあて、もうそろそろ寝ようかなあ〜」

と就寝の準備をしようと車椅子を操作しようとした所、

「…あれ？流れ星が…」  
今願い事をした流れ星の異変に気付く。　なんと流れ星が段々と大きくなつてきていた！

「わ、わわわ！？あ、あれってもしかしてこっちに近づいてきてるんちゃうん！？」

そう、紛れもなくその流れ星は確実に八神家へと接近していた。そして流れ星はすぐに目で大きさが確認できる程に近づいてきて、そして

「ひゃあー!!」

おおよそ直径2m程度のそれは、丁度はやての目の前の八神家の庭へ落下し、眩い光を放つたのを最後にはやては気を失ってしまった

サイバー空間から意識を断つたエックスは、その間久しぶりに夢を見ていた。

自分がまだ世界を救った英雄として人間、レプリロイドを問わず誰からも慕われ、敬われていたほんの僅かな時間。まだサイバー空間ではなく、レプリロイドとして世界で活動していた頃の出来事の夢。

世界を救った英雄、救世主、偉大な人物、と彼を尊敬したりまたは崇拜している者が大勢いたが、本人はそれをあまり快く思わなかった。

ただ他のレプリロイドを倒した事によって自分が英雄視されるのが心苦しかった。たとえ倒したのが悪魔と謳われるレプリロイドであったとしても、エックスからすればそれも自分と同じ“生”を持った者で、日々戦う事に悩んでいた彼にとってそれらの輝かしい呼び名がとても喜べる物でなかった。

（僕は英雄なんて大層なものじゃない。…ただ、ただ僕は、人もレプリロイドも関係なく、誰とでも手を繋げる、そんな世界を…）

そこまで至った時、エックスの意識は夢から一気に覚醒する。

「…う、此处は…？」

エックスが目を覚ました時、すぐに目に入ったのは幾つもの星が瞬く夜空だった。すぐに起き上がり、自分の今の状態を確認（主に駆動部分や武装に関して）したが、特に異常は見られなかったので軽く息をつく。

どうやら自分は転送されたか、もしくは上から落ちてきたらしいとエックスは判断する。

そして、今自分が居る場所が自らの認識と大きく異なっていることに気付く。

「！…これは、一体…！？」

驚いて思わず周りを見渡すエックス。

「…こんな様式の家はネオ・アルカディアにはない…。それに、巡回しているはずのメカニロイド達もいない…？」

ネオ・アルカディアとはかつてエックスが人類の生きる新しい樂園として創設した唯一の国のようなもので、そこで人類は皆生活に何一つ不自由することなく豊かに暮らせる場所だった。人間達が暮らす居住区があり、そこを24時間パトロールしているメカニロイドと呼ばれる機械が必ず居住区を巡回しているため、エックスが見ている景色はにわかには信じられないものだった。

様々ま疑問を抱えつつもひとまずは自分が今居る庭の家主に会ってみようと考え、後ろを振り返ると

「……え？」

車椅子に乗った状態で気絶している少女に気がついた。

どれくらい時間が経ったか、はやてはその意識を取り戻すと、

「ん……うん……。あ、あれ？」

どういふ訳か自分がいつの間にかベッドで寝ていたことに気づく。もしかしたら夢だったのかとはやては思ったが、しかし覚えているかぎり、自分はたしかにあの後気を失ったはずだ。

何故だろう、と思考をめぐらせていると、不意に部屋のドアが開き、

「あ……ごめんね。驚いたかい？」

水を入れたコップをお盆に載せて、優しそうな青年が入ってきた。そしてごく当たり前のようにはやてにコップを渡して

「気分はどうか？正直僕にはこれぐらいの事しかできないんだ・  
」

普通に自分の心配をしてくれて、そして残念そうに少し俯く青年の姿にはやてはひたすら困惑したが、とりあえずはお礼を言うことにした

「あ……ありがとうございます」

「礼を言われる程じゃないさ。倒れている人がいたら、助けるのが普通だろう？」

そういつて自然に微笑む青年につられて、はやても笑う。

「あははっそうやね。確かに普通やった」

「ふふっ……まあ君に怪我がなくてよかった」

「あ、そうだ。名前」

「ん？」

「あなたの名前はなんていうんですか？」

はやてにそう聞かれたエックスは、この世界に来て初めて、自分の名前を名乗った。

「僕の名前は・・・エックス、さ」

正直なところ、エックスは自分の名前を名乗るのが好きでない。特に人間に関して言えば自分が名乗るまでもなくこちらに頭を下げてくるのが、エックスにとっては苦々しかった。

自分が何者であろうと関係なく、人間とレプリロイドの違いも気にせず、対等な立ち位置で話したいと切に望んでいた。

だから、でもしかし、この少女も同じような反応をするのだろうか、思っていたエックスだが、

「エックス？へえ。変わった名前やね」

少女から返ってきたのは思いもよらない言葉だった。

ここでエックスは先程から頭に浮かんでいる自分の予想を確かめるように少女にこう訊いた。

「・・・ここはネオ・アルカディア居住区のどの辺りかな？」

「ネオ・アルカ・・・？何ですか、それ？」

この答えを聞いてエックスの予想は的中した。

人間が自分のことを、そうでなくともあの理想郷を知らないというのはエックスのいた世界ではありえないことだ。しかし先の少女の答えは、この世界にそんな物は存在しないと否定したに等しかった。

ここに来てエックスは、自分が紛れも無く何処か別の世界に飛ばされたことを理解した。

「あ、あのう・・・大丈夫ですか？」

恐る恐るといった感じで少女が尋ねる。そんなに悲愴感溢れる表情をしていただろうか、と思ったがエックスは笑って言う

「いや・・・少し驚いただけさ、ありがとう。そうだ、君の名前は何ていうのかな？」

良ければ教えてくれないかい？と言うと、少女もまた笑ってこう返した。

「うちの名前は八神はやてっていうんや」

かくして、青き英雄と少女は出会った

## 第2話（後書き）

エックスの性格や口調はゼロシリーズ寄りにしようかと思っています  
（世界観はゼロですが）

### 第3話（前書き）

今回かなり無理のある設定が登場します。  
こんな小説でも見てくれる人がいるのが嬉しいです。

### 第3話

自分が元居た世界とは違う別の世界へと飛ばされたことを理解したエックスは、とりあえず目の前の少女、八神はやてに自分の事情を説明した。

自分は人間ではなく、レプリロイドと呼ばれる限りなく人間に近い存在であること、そして人間とレプリロイドが生きている世界という事など元居た世界に関する情報を伝えた――尤も、自分がその世界で英雄と謳われている事は伏せておいた。

自分が誰かの声に呼ばれてこの世界に飛ばされた（結果的には八神家の庭に落とされた）辺りに関しては流石に信じてはくれないだろうと思っていたエックスだったのだが……

「……と、これが僕の居た世界なんだが……」

「うーん……なんやえらい難しい話やね」

「いや、信じてもらえなくてもいいんだよ。かなり無理があるだろうからね……」

「いや、信じるで」

「……どうしてだい？」

「だって、エックスさんはいい人やから。嘘をついてるような顔じゃないからや」

エックスの心配は杞憂だったようだ。嬉しく思うと同時に自分は外から見てそんなに分かりやすい顔をしていただろうか、とも思った。そんな風に思考するエックスを尻目にはやてはおかまいなしにエックスの体に触り始める

「いや〜でもこんな見た目で人間じゃなくてロボットだなんて信じられんわあ〜」

「まあ僕の見たい目は特に人間に近いからね。他のレプリロイドは動物をモチーフにした人が多かったかな」

「へえ〜そうなんや。それにしても綺麗な目やね〜。おでこのところ赤い宝石みたいで綺麗やわ〜」

正直今まで生きてきた中で自分に対してここまで遠慮なく接してきた人間はほぼいなかった（いたといってもかなり昔のことである）ため、このように人間と交流することはエックスにとってとても新鮮であった。

そして話はエックスのこれからの事についてどうするかといった方に移る

「そついや・・・エックスはこれからどうするつもりなん？」

「そうだね、この世界にレプリロイドの僕を知っている人はいないだろうからね・・・今のところ特に考えはない、かな」

「せやったら、あの・・・」

「？ なんだい？」

「その・・・良かったらこの家で暮らしてもらえへん、かな？」

「いいのかい？まだ知り合っただばかりなのに・・・」

「ええんよ。・・・うちな、長い間この家で一人で暮らしててな、一緒に暮らす家族がいなくて、実を言うと寂しかったんよ」

「そうだったんだね・・・」

「やっぱ、アカン・・・かなあ？」

そう言って不安そうにこちらを見上げるはやての姿にエックスはほんの少し考えた後、微笑んでこう答えた

「・・・僕でもいいのなら、喜んで家族になるよ」

「ほ、ホントに!?!」

「うん。本当に」

そう言うとはやては嬉しそうに笑って手を差し出し、

「それじゃあ、これからよろしくなエックス！」

エックスも笑って手を差し出す

「此方からもよろしく、はやて」

そして握手を交わし、エックスは八神家の家族の一員となった

かくしてはやてと家族になったエックスなのだが・・・

「・・・えーっと、はやて?」

「あ、やっぱりレプリロイドだから食べれへんかな・・・」

「いや・・・それは・・・」

彼は今早速窮地に立たされている。食事の場面で。

エックスは紛れも無くレプリロイドであり、レプリロイドには人間

と同じ食べ物を食べる能力はない。できるとしたら、内部の擬似消化器官という名のタンクに口にした物を溜めることぐらいである・  
・飽くまでも溜めるだけ。

御多分に洩れず食事する能力を備えていないエックスは、とりあえず一通り八神家の中の案内が終わり、基本的な家具等の使い方を説明してもらった後、自分は食事をする必要はないことをはやてに伝えようとしたのだが

「そっぴやレプリロイドって人間に近いんやから・・・あ！そっぴえばエックス今日の朝ご飯食べてへんかったやろ？ならうちの分も一緒につくらなアカンな！」

「あ・・・はやて」

言っが早いかはやては車椅子を使っているにも関わらず、凄まじい速度で台所へと消えていった。その様子をエックスは呼び止めることもできず、呆然と立ち尽くしていた。

しばらくして、はやてに呼ばれたエックスが居間に行くと、そこには人間でないエックスにも美味しそうだと分かるくらい見事な朝食が配置されていた。エックスも感嘆する。

「これは凄いな！はやては料理が上手なのかい？」

「えへへ・・・まあ得意、かな」

「いや見事なものだよ」

そんなやり取りをしている内についついエックスは先程言おうと思っていた事柄も忘れて、流れるようにはやてと向かい合う位置の椅子に座り、

「じゃあ、いただきます」

「?? イタダキマスってなんだい？」

「あー、食べる前の礼儀って感じの言葉やね。今から食べる食べ物に感謝するんよ」

「へえ、そうなんだ・・・あ」

・・・これから食べるというタイミングでその事を思い出した。

「はやく、本当に済まないんだけど・・・」

「え・・・どうしたんエックス・・・？」

そう切り出した途端、不安そうな表情になるはやく

「・・・あ、お腹空いてなかったん？」

「いや、そうじゃないんだ」

「な、なら・・・うちの料理は食べられへん、とか・・・？」

「ええ?! い、いやそうじゃないんだ、ただ・・・」

「あつう・・・」

不安そうな表情が一気に涙目になるその顔はエックスの罪悪感をこれでもか、というくらい決る

そうして時は戻って・・・

「えーっと、はやて？」

「・・・あ、やっぱりレプリロイドだから食べられへん、のかな・・・」

「いや、その・・・」

この時ばかりはエックスは自分だけの特権である”悩む”事ができるといふ己の能力を呪った。どうせこうなるくらいなら、普通にはやての料理を食べればいいじゃないかと。

レプリロイドが先程のような自らのタンクに食べ物溜めるといふ行為は構造上でできれば避けたいものであるが、この少女の今にも泣きそうな瞳を見て、どれだけの者がそんな非常な行為を選択できるだろう（某紅い英雄はやりかねないかもしれないが）

その上、人一倍強い正義感と責任感を持つエックスからすれば、はやてのような幼い少女を自分の行いによって悲しませたり、その後泣かせてしまうというのは絶対にしてはならない事と思うだろう。

・・・その瞬間、エックスの中で

はやてを悲しませない>ロボット三原則

といった感じの方程式が成り立っただとか・・・

視線を感じながらも覚悟を決めたエックスは、見様見真似でフォークを持ち、ゆっくりと一番近くの皿に盛られた料理に手を伸ばす。

その一部をフォークで刺し（タコさんウィンナー）、またゆつくりと口に運び、食べた。

バツチリ見られているし、そのまま丸呑みせず噛んでおかないとマズいだろうとエックスは咀嚼する。

するところまで、エックスはあることに気づく。

（ん…これは…？）

今まで感じた事のない感覚を覚えつつ、無意識的にエックスは呟く。

「…おいしい」

「ほ、本当!？」

「うん…おいしい。これおいしいよはやて!」

思わず声を上げるエックス。その様子を見てはやての顔も綻んだ。

先程の深刻な悩みはどこへやら、エックスはどんどん料理を食べ進め、あっという間に食べ終えた

「ああ、おいしかった!えっと…」

「食べ終わった時はごちそうさまって言うんよ」

「うん、はやて、ごちそうさま」

「えへへ、お粗末さまでした」

朝食を終え、食器の片づけをしながらエックスは先程の自分の体の変化について思考していた。分析してみた結果、物を食べられるどころか、食べた物の熱量等の栄養をエネルギーに変換している事に気付き、かなり驚いた。同時に従来 of 太陽光によるエネルギーも加えて、動力源に関して何ら問題はない事も理解した

。（この事態はこの世界に来る際、体の構造に何らかの原因不明な変化が起こったものであると結論づけた。そんなことよりもエックスの頭の中は現在、食に対する感動でいっぱいである）  
元指導者として人間の食生活についてもっと考えるべきだったろうか、こんなに充実感が味わえるとは知らなかったなあ 等と一人で色々と思っていると

「エックス、口元にご飯粒付いとるよ」

何処かニヤニヤした表情のはやてに指摘された。

「ありがとやはやて。・・・それにしても、とっても美味しかったなあ、はやての料理」

「そ、そんなに?」

「うん、僕はかなり長い時間を生きてきたけど、こんなに満たされた気分は初めてだよ」

「あう・・・そんなに褒められると恥ずかしいわあ・・・でも、エックスが美味しいって言うてくれるんなら、うちも毎日つくったるで」

「本当かい!?! はやて、ありがとぅ!」

そういつて喜ぶエックスは何というか純粹な少年そのものであった。どう見ても戦争を終結させた英雄の振る舞いでないそれは、彼を慕う者からすれば到底考えられない姿である。（某四天王の内、隠将や賢将なら啞然とするだろう。案外妖将なんかはニヤニヤした笑みを浮かべるかも分からない。闘将は・・・お察し下さい）そんなエックスの様子を見て変わらず笑っているはやては、何やら幸せそうだったそうなの。

そんなエックスだが、夕食時には「あんまり大きな声出したらアカンよ」とはやてに注意され、しょぼくれつつも”テーブルマナー”という、食事中に守るべきものを教えられ、以降静かに・・・料理を味わい、感想を言ったりはもちろん忘れない・・・人並みのマナーを守って食事をするようになったのであった。

### 第3話（後書き）

まだまだこんな感じのゆるい話が続くかと思われま

す。・・・とりあえず闘将は戦闘以外あまり興味がないと思っております。

## 第4話（前書き）

かなり間が空いてしまい、本当に申し訳ないですorz

## 第4話

時刻は午前6時、決まってこの時間にエックスは起きる。レプリロイドにおける睡眠は人間のそれとほぼ意味合いは同じである。はやてに用意してもらった布団から出て、とりあえずエックスは体をゆっくりと伸ばす。・・・そのしぐさはかなり人間臭かった。

「さて、と。まずは新聞を取ってきて、あとは玄関の掃除から始めるかな」

この世界に来て、今日で3回目の朝を迎えたエックスであった。

はやての家族になってからというもの、エックス自らははやての手伝いをしたいと言い出したのがきっかけとなり、まだ数日しか経っていないというのに八神家の家事はかなりの割合でエックスが受け持っている。

はやてからは別に気にしないでいいと言われたものの、エックスの性格上何もせずに世話になることは出来なかったのだ。というかむしろ、本人は自分が今まで体験したことがない家事がとても新鮮なのだろう、普通に楽しんでやっているようである。

玄関の掃除が終わるとすぐさまリビングへ行き、朝食の準備を始める。

その手つきは未だ慣れてはいないようだが、とりあえず人並みレベルの出来映えとなった。（余談だが、エックスが八神家で初めて料理を作った時の出来は目も当てられない有様だった。この結果は彼の努力が見て取れる）

と、「ここではやてが起き出してリビングへとやってきた。

「あ、はやて。おはよう」

「ん〜おはようさん、エックス」

はやての朝の身支度を手伝い、何時もの様に席につき、手を合わせる。

「「いただきます」」

自分の料理の腕に自信がないエックスだが、求めるまでもなくはやてから感想を聞く。

「うん、やっぱりエックスの作った料理は毎日美味しくなってるわあ」

「そうかい？それは良かった。今日は昨日よりうまく出来た気がするからね」

他にも、味付けや焼き加減等の批評を受けて、それを真剣に受け止めるエックス。このような図が毎朝の日課となっている八神家である。

他の家事を済ませていると、あつという間に時間は過ぎ、昼食の時間となりこれを味わう。なお、エックスは朝食担当でありはやてが

昼・夕担当である。

昼食を終えたあと、エックスのもう1つの日課が始まる。

「それじゃ、今日も行ってくるよ」

「気をつけてな〜エックス」

その日課とは、ここ海鳴市の探索・・・平たく言えば散歩である。はやてに世話になるのだから、必然的にこの町の地理を把握しておかなければならないというのが理由だが、本音としてこの街の景色を楽しみたいというのがあった。

さておき、散歩を始めてからまだ数日だというのに、いつのまにやら町全体にエックスの評判が広まっていた。というのも、散歩初日に迷子の子供を家まで一緒に送り届けたり、また別の人の落し物を見事捜し出したりと、散歩というよりもはや人助けをして回ったと言った方が正確な事をしていた。

このようにしてご近所さんに顔とその誠実な性格が知れ渡り、こうして通りを歩くだけで様々な人から挨拶されるという、ある意味彼の心優しい人柄を顕著に表しているのだった。

そんなこんなで時刻は午後6時。帰り道を歩きながら、エックスはふとあることを考える。それは過去に自分の創った理想郷、ネオ・アルカディアとの違いについてである。イレギュラー戦争によって荒廃し、限られた土地でしか生きることができなかった人間、そしてそれを支えるレプリロイド達。人間達はかつての地球の姿へ思いを馳せ、人工的に自然を造り出し、それを愛でた。

対してこの海鳴市は、戦争もなく、造られたものでない天然の自然が広がっている。人々も戦乱に怯えることもなく皆笑って暮らせる

世界。

そして、そんな平和な世界に流れ着いた自分がいる。この事をエックスは今なお、本当に良いのだろうかと考える。

おそらく、というか確実に彼の周りの者は彼の今の状況を認めるだろう。しかし、エックスはまだ自分は休むべきではないと、そう思っている。

だからこそ、サイバー空間であの声に応え、今ここにいる。

(ならば僕は、力の限りあの子を・・・はやてを守ろう。何があったとしても)

すっかり日が暮れて薄暗くなった町を歩きながら、そう決心するエックス、すると突然道の真ん中で身構える。

「・・・」

暫くして、構えを解き再び歩を進める。エックスは何者かの気配を感じて警戒していた。そして、それらが消えて後歩き始めたのである。

(少なくとも2人は居た・・・通り魔か？それとも・・・)

頭の中であれやこれやと予想を立て、最終的にエックスはこれから自分の周り・・・はやてを含めて、警戒を強める事を決めた。

「・・・勘付かれたか。見た目より結構やるね、アレ」

「うん、とりあえずこの事は御父様に伝えておこっか」

「……闇の書に関わるようであれば、即刻始末しておかないと、  
ね」

その日の夜、エックスとはやてが話している中、ふとはやてがこつ  
言った。

「あの、エックス……」

「ん？何かな、はやて」

「その……えーっと……」

どうやら言いつらい事らしい、そう思いエックスはやさしく声を掛  
ける。

「ゆっくりでいいぞ。話してごらん」

「うん……あのな、今日実はうちの誕生日なんよ」

「そうだったのかい!？」

「わわ、そんな驚かんでも」

「驚くさ、誕生日おめでとう、はやて！」

エックスはにっこりと笑う。それに照れながらはやても応える。

「えへへえ・・・家族に祝ってもらえることって、こんなに嬉しいことなんやなあ・・・」

それからは、ひたすらエックスがはやてを祝福したり、いざという時のためにレシピを覚えておいたお菓子（夜だったため、材料は即席で）を振舞ったりと、ここ最近で一番八神家が騒がしかったとか何とか。

気がつけばもう夜も深く、はやてが静かに寝息を立てている隣でエックスは椅子に座ってその寝顔を優しく見つめていた。先程まで話し込んで流石に疲れたのかはやてはぐっすりと眠っている。そばらくそれを見届けた後、自分もそろそろ眠ろうと椅子から立ち上がり、何時も自分が座る庭の窓際に腰を下ろす。すぐに寝ようか、とも思ったが、夕方の事もありもう一度エックスは自分を狙っていたであろう者について熟考していた。と、その時

「きゃあああ！」

「・・・ッ!」

何処からか悲鳴が上がる。その聞き覚えのある声を聞いたエックスはすさまじい速さではやての部屋へと戻る。その間、エックスは激しく後悔する。守るつもりなら何故傍から離れたのか、と。

「くそっ・・・無事でいてくれ！」

そしてすぐにドアを開け、名前を叫ぶ。

「はやて！無事か！・・・?!」

エックスが部屋に入った時、部屋の中には見知らぬ男女が4人いた。その4人が驚いたようにこちらを見る。

「貴様・・・何者だ！」

「お前達こそ、はやてをどうするつもりだ！」

「我らは闇の書の守護騎士、ヴォルケンリッター」  
内、1人の赤いポニーテールの女性が言う。

「そして私は烈火の将、シグナム。・・・主には指一本触れさせはしない」

そして何処からともなく長い剣を持ち、エックスに突きつける。どうやら相当腕が立つようであり、そして話を通じる状況でないことをエックスは悟る。

「やるしか、ないのか・・・」

仕方なしに自らの腕だけを臨戦態勢に変化させようと身構える。

「なー。ちょっと悪いんだけどよー」

・・・が赤い少女に割って入られる。そのままの体勢のまま2人は少女を見る。

「そいつ、何か気絶してるぜ？」

「うへえ・・・」

この状況下で1人、見事にのびているはやての様子に2人の間に張り詰めていた空気は一気に散るのであった。

## 第4話（後書き）

今回は特に取り留めがないような…  
あと近日中にちょっとした番外編を投稿しようと思っています

## 番外編（前書き）

この話はXシリーズの時代の話になります。のでエックスの一人称に違和感があるかもしれないです

## 番外編

時代は妖精戦争が終結し、人類の理想郷が創られるよりはるか以前、まだ人類がイレギュラーの起こす事件に怯えつつも平穏に暮らしていた時期。そして街を歩く2人のレプリロイド。

その2人とは、第17精鋭部隊隊長エックスと第0特殊部隊隊長ゼロであった。

この時代は即ち、あの2人の英雄がイレギュラーハンターとして活動していた頃である。

して、この2人は何処へ向かっているのかといえば・・・それは少しばかり時を遡ること数時間前

珍しく出勤命令もなく普段あまりこつこつとした和やかな空気は滅多にない、イレギュラーハンター達の本拠地ハンターベース。そしてその中でも最高クラスとも言うべき実力者のエックスとゼロ。先程オペレーターから呼び出されていたエックスがゼロの所へ戻ってきた

「なあゼロ、俺達宛てに依頼が届いてるんだが」

「俺達・・・？という事はかなり厄介な事件なのか？」

そう親友に訊かれて首を横に振るエックス

「いや、事件が起こった訳じゃないんだ。この近くの人間達の保育所からの依頼で・・・」

「保育所だと？」

その単語を聞いた途端露骨に嫌そうな顔になるゼロ

「ん？ゼロって保育所とか子供が嫌いだったか？」

「別に嫌いでも何でもない・・・ガキの扱いが少々苦手なのは認めるがな」

「ならいいじゃ」「只、俺達ハンターの仕事を遊びか何かと勘違いされるのは気に食わん。どうせ保育所へのゲストの依頼、といった所だろ？」・・・うん、まあそうなんだけど・・・」

少し俯くエックス。だがすぐに顔を上げ、

「でも、この依頼で他の人達にハンターの仕事をもっと伝わる良い機会かもしれないだろ？」

「ならお前が行ってこい。俺にはそういう役は向かんからな」

「この依頼は”2人”で行くのが条件なんだ。それに、俺は・・・人とレプリロイドをもっと近づけさせたいんだ」

その揺らぐことのない瞳を見たゼロは、観念したようにため息を吐く

「仕方ない・・・そこまで言われちゃったからには、俺もついていくさ」

「そう言ってくれるか、ゼロ！」

「フツ 礼には及ばん」

そして時は戻り、今2人は依頼主の保育所の前にいる。

「それじゃ、行くかゼロ」

「ああ」

短いやり取りを交わし、中へと入る。ゼロは後々物凄く後悔する」となるのだが。

「いやーあつという間だったな」

「・・・」

「ん、どうしたゼロ？」

「やらん・・・今後一切こんな任務はやらん」

「??？」

2人が保育所から出てきたのは既に辺りが薄暗くなった頃だった。エックスは笑顔だがどういう訳かゼロの表情は不機嫌を通り超して怒りすら抱いていそうな顔をしていた。いや、案外諦めかも知れない。

「お前は何で笑っていられるんだ・・・」

「え？俺は別に嫌な事をされた覚えはないぞ？」

ゼロが今の状態になった主な原因は、やはりというか保育所にいた子供達であった。

2人が到着するやその場にいた子供達全員から殺到され、質問やら見た目の感想やらがすさまじい勢いで飛んでくるのだ。

エックスは丁寧かつ笑ってこれに答えていたが、ゼロの方はいきなり大勢から迫られ、つい反射的にゼットセイバーを取り出しそうになっっていた。(実際龍炎刃一步手前くらいまでいった)

しばらく揉みくちやにされた後、保母の注意によってようやく解放されたゼロの顔は、既に何やら死地に赴いている最中のような顔だったとか。

やっとこさ挨拶も終わり、早速ハンター業務についての質問がスタートしたかと思いきや・・・

「ゼロさんにしつもんがありまーす」

「何だ？言ってみろ」

「ゼロさんはおんなのひとなんですかー？」

初っ端からド級の質問が飛んで来た。

「・・・いや、俺は男だ」

「えーでもそのかみとかきれいじゃーん」

「そーだそーだ」

「綺麗と言っな・・・」

平然と返したように見えるが、本人はかなり気にしていたようである。

そしてトドメの一言

「ゼロさんとエックスさんって、こいびとってやつみたいだね！」

「！...」

その瞬間、ゼロの体全体が石のように灰色に見えた。流石にこの発言には隣にいるエックスも苦笑いである。

質問が終わった後もゼロの気苦労は絶えない。移動するたびに足元に纏わりつかれるは髪を引っ張られるはと、ゼロに謎の人気があるのか3分の2くらいの子供達がゼロにくっついていて。ちなみにエ

ツクスの所に来る子供は別段悪戯等はない。エックスのオーラか何かだろうか。

こうして、エックスからすればあつという間に、ゼロからすれば凄まじく長かった時間は過ぎていった。子供達は皆、それぞれの親と共に帰ってゆく。

「いやーあつという間だったな」

「・・・」

「ん、どうしたゼロ？」

「やらん・・・今後一切こんな任務はやらん」

「?..?」

ゼロの様子をエックスが気に掛けつつ、2人がハンターベースに戻ろうとしていたその時、

「エックスさーん、ゼロさーん」

「あ、君は」

「!..!」

2人それぞれ異なる反応を示しながら振り向くと、1人の少女がこちらに駆け寄ってくる。その手には袋のようなものを持っていた。

「どうしたのかな？」

「あのね、これわたそうとおもって」

「これを俺に？」

「うん、がんばってつくったの！」

先程の保育園で子供にもつくれるような簡単な調理をする時間があった。そのときに一緒につくったのだらうとエックスは納得した。

「ありがたく貰っておくよ」

（おい、エックス。俺達は・・・）

（いいんだよ、少しだけなら大丈夫さ。そんなことよりほら、君にも渡したいみたいだよ？）

（何？）

ふとゼロが目を下に遣ると、少女が顔を見上げていた。

ゼロこの時、少女をあまり直視できなかった。・・・その特徴的な茶色の長髪が、彼にある人物を連想させたのだらう。

ゼロがそのまま黙ってままで、少女も渡し辛そうにもじもじしている。

その様子を見かねてエックスが助け舟を出す。

「そんな顔しなくてもいいだろ、ゼロ？ああ、別にゼロは君の事を嫌いな訳じゃないんだ」

「そうなの？」

「そうさ。だから何も心配はいらないさ。さ、渡してらん」

屈んで少女に話かけるエックスは妙に慣れた様子である。

そして少女はやっとゼロに袋を渡す。

それを貰ったゼロはただ一言返す。

「・・・礼を言う」

その言葉を聞いて安心したように笑う少女、その笑顔がゼロには一瞬だけ”彼女”と重なって見えた。

(・・・)

そんなゼロの心情も知らず、少女は再び駆け足で保育所の方へ戻っていく。エックスは手を振り、ゼロは静かにそれを見送った。

再び帰路につく2人。するとエックスがふと口を開く。

「なあ、ゼロ」

「何だ？」

「あの子達は幸せそうだったな」

「・・・ああ」

エックスは拳を握り、続ける。

「俺達がこの街を、人間を・・・あの子達をこれからも守っていくんだよな」

「・・・ああ、そうだな」

ゼロはフツツとシニカルに笑って返す。

「明日からまた忙しくなるな、エックス」

「ああ、もちろんだ。この平和を守るために！」

こうして2人はまた、戦場へと赴いていく。

・・・久しぶりに夢を見たな。それにしても懐かしかったなあ。そういえばあの子もはやても料理ができるのか、僕もちよつとやって

みよづかな

- - エックスが料理初心者を超える悲惨な失敗をする、ほんの数時間前。この世界でエックスが迎えた2回目の朝での出来事である。

## 番外編（後書き）

誰が主人公か分からない話でしたorz一応、時代はX4とX5の間の設定で書きました。

## 第5話（前書き）

初めてアクセス総数を確認したら予想外のPV80000超に全力で  
午後ティー吹きました

ありがとうございます！

## 第5話

何時もは和やかな空気が漂う八神家のリビングだが、この時ばかりは普段からは考えられない程空気が張り詰めていた。

今リビングにいるのはエックスとヴォルケンリッターの計5人。その内、このただならぬ雰囲気の元凶は青き英雄と烈火の将の2人である。

両者ともテーブルに座っていて、お互い正面から向かい合っていた。しかし、2人の様子はそれぞれ違った。

烈火の将ことシグナムはもう露骨に警戒心MAXなのが顔を見ただけですぐ分かるくらい正面の英雄を睨みつけている。一方、青き英雄ことエックスはというと、警戒や疑惑といった表情はない。だがしかし、普段のやわらかい表情は一切見られず、ただ静かに、冷静に、目の前の相手を見ていた。

そしてそれ以外の3人は、その様子をただ遠巻きに見つめていることしか出来なかった。本来参謀役であるはずのシャルルに至っては全く動かない2人の様子にオロオロしているといった有様である。しかもこんな状態でかれこれ数時間以上経過している。

まあ、こういった膠着状態は昔の仕事柄慣れっこのエックスであった。

(・・・この人達、人間のようだけど、さっきいきなり出した剣といい、やはり普通の人間じゃない)

この時、ほぼ同じ瞬間にシグナム達も“念話”によって会話をしていた。

(どうだ、シャマル)

(えっと、うん。やっぱり彼は人じゃないみたい)

(ふん、やはり人の姿を模倣した人形か何かといった所か。ますます捨て置けん)

(でもよーシグナム、そいつ普通に人間みたいに喋ってたぜ?)

(それに感情を持っている様にも見えた。人ではないからといって疑うどころか倒そうとするのは早計だと我は思うが)

(からといっても不審な輩に変わりはない)

どうやら目の前の青年の対処についての会話のようである。それも、かなり物騒な類の

「あーよく寝たわ。……って何やこの空気!」

暫くして、はやてがリビングに来たことで、ひとまずこの謎の睨み合いは終了した。

「あー……とりあえず、皆自己紹介から始めてくれへんかな?」

未だギスギスした空気の打破と今この現状の確認を兼ねたはやての

提案により、シグナム達から自分達の役目、そして魔法と闇の書についての説明がされる。

「信じていただけないのも無理はありません。ですが……」

「ん〜、信じるで」

「……ええ?!何故そんな軽く……」

「嘘吐いてるように見えんなあ……それに、目の前でいきなり本から出てきたら、そりゃ信じるわあ」

「何や最近びっくりする事多いなあ、と何と無く隣に座るエックスを見ながら言っはやて」

「……色々すまないね、はやて」

「いや謝らんくても」

「あの、主。その男は一体何者なのですか……?」

「そう言って再びエックスを怪訝そうに見るシグナム」

「せやからそんな睨んだらアカンて。エックスはな、うちの家族や」

「はやてはエックスとの出会いを簡潔に説明する」

「……とまあ、こんな感じやね。なーエックス」

「そうだね。ありがとう、はやて。……じゃあ僕も自分の事くら」

いは説明しようかな」

次にエックスから自分の事情……主にレプリロイドと元居た世界……についての説明をする

「……そんな世界が本当にあるのか？」

「でもやっぱり人間にしか見えないわ……」

「っーかお前、空から降ってきて平気なのかよ……」

「ほう……」

感想は各々違うようである

と、ここではやてがこの場の全員に向けて言う

「で、これからの事なんやけど……」

それを聞き、闇の書の主としての命令だと心して次の言葉を待っていたシグナム達だったが

「とりあえず、一緒に暮らす家族になるんやから、まずは服とか用意せんとな！」

「「「「……はい？」」「」「」

まさかの主の一言により4人とも見事にハモリ

「あ、そうだね。なら僕が行こうか？」

「……えええ?!」「」

普通にその提案を呑んだエックスに、4人同時にずっこけたのだった

結局はやてとエックスの2人で買い出しに行くこととなり、行く途中で色々と話し合った所思ったよりも買う物の量が多く、服の選定にも時間がかかったこともあり(主に女性陣の分が占めている)、家に戻った時には既に日が暮れていた

はやてがリビングに戻ると、やはりというか4人とも今朝と同じ様にそこに居た

「別にそんなしんみりとせんでもええのに」

「いえ、主の断りなく勝手に歩き回るのは……」

「も、これからは家族になるんやから、そんなこと気にせんでもええの!」

「は、はい……」

主からの命令やで、!、と言ってシグナムの肩をポンポン叩く

「ところで主、もう1人は何処へ……?」

そんな様子のはやてにザフィーラが尋ねる

「ん、エックスなら今荷物を運んでもらってるけど・・・」

「まあ、ちよつと遅くなっちゃったかな」

「遅いでエックス」

玄関の方から声がしたので5人が目を遣ると、両手と背中に大量の荷物を持ったエックスが入ってくる

すさまじい荷物の量であり、エックスの身長を軽く超える

「お、お前・・・平気なのか？その量・・・」

「え？大丈夫さ、このくらい」

「このくらいって・・・」

「とりあえず、君達もはやてと一緒に整理を手伝ってくれないかな？まだ荷物があるんだ」

「わ、わかった」

「うん、頼んだよ」

そう言って再び玄関に戻るエックス

「ほんとにすげえな、アイツ・・・」

「それもそうだが、今は主の手伝いだ。早く済ませるぞ」

「それにしても結構な量ね・・・」

「そんじゃ、がんばるか」

はやての一言で荷物の整理を始める一同。だが、シグナムは1人思った

(やはり只者ではないな、奴は・・・)

未だ疑惑の晴れないようである

整理も終わり、夕食の準備に取り掛かるはやて。その隣で、1人だと大変だから、とエックスも手伝い、ヴォルケンリッターの4人もはやての指示によりそれぞれきびきびと準備をする

そして、料理を運び終わると、テーブルが普段の数倍の料理で埋め尽くされていた

「食べる時はいただきますって言うんやで。それじゃいただきますーす！」

はやての説明に懐かしいな、と思ったエックスである

「うめえ、はやての料理おいしいな！」

「そう言うってくれるとうれしいわあ」

今日の夕食は賑やかだなあ、等とぼんやり考えるエックスだったが、ふと床に目を遣ると

「……うむ」

狼の姿で食事をするザフィーラを見た

「……君はそれでいいのかい？」

「この姿でいた方が色々都合がいいのでな。何、遠慮はいらん」

「そうかい、ならいいんだけど……」

それにしてもこの食べ物はずまいな、と食を進めるザフィーラの皿にあるのはまごうことなくドッグフードである

本人の要望とはやての意見とはいえ、これでいいものかと思っていたエックス。そこへシグナムから声が掛かる

「お前、物が食べれるのか？」

「うん？そうだね、僕も同じ様に食べるけど、どうしたのかな？」

「いや、人でない人形が物を食べるのが少し不思議……」

「人形やないッ！」

そこまで言ったシグナムだが、途中で遮られる

「エックスは、エックスは人形なんかやない！」

「あ、主……」

「ちゃんとご飯だって食べるしうちと同じ様に寝る！それに笑ったり褒めてくれたりだってする！」

少し涙目になりつつも言葉を続けるはやて。

その勢いに何も言えないシグナム

「だから、だからッ！人形なんて「いいんだ、はやて」……エックス」

制止する様にはやての肩に手を置くエックス

「どんなに人に近くても、僕はやっぱり人間じゃない。……それは事実なんだ」

何処か悲しげに言うエックスの様子を見てはつとしたシグナム

「でも、僕が人間じゃなくとも、はやての家族なのは変わらない、そうだろう？」

「……うん」

ようやく落ち着いたはやて。そして優しく頭を撫でるエックス。2人の姿は、本物の家族そのものであり、兄と妹の様にも見えた

夕食を終え、他の5人も眠りについた頃、エックスはいつもの場所でいつも通り夜空を見上げていた

「・・・誰だい？」

振り返りもせず言うエックス

「やるな、エックス」

そう言って近づいてきたのは、シグナムだった

エックスが横にずれ、場所を譲る。それに応じて隣に座るシグナム

「いつも夜になるとここに居るのか？」

「そうだね。・・・僕の居た世界には、こんな綺麗な自然はなかったからかな」

「そうか」

そうして少しの静寂の後

「先程はすまなかった」

「謝らなくてもいいさ。気にしていない」

「だが主の信頼する者を侮辱した事に変わりはない」

そしてもう一度、すまなかった、と謝るシグナム

そんな様子に困った様にエックスは笑う

「僕達はこれから一緒に暮らすんだ。そんなに謝らなくてもいいんだよ？」

「・・・許してくれるのか？」

「許すも何も、僕達はもう“家族”だろう？」

「フ・・・そうだったな」

皆にも明日言っておくか、とシグナムは自然に笑う

エックスは右手を差し出す。それを見てシグナムも右手を差し出し

「よろしく、エックス」

「よろしく、シグナム」

握手を交わす2人。蟠りも解けたようだ

「そうだエックス。相談があるんだが」

「ん、何かな？」

「レプリロイドというのは戦いにも参加できると言ったが・・・」

「ああそうだね、確かに僕は戦闘用の「本当か!?!」う、うん」

いきなり元気になったシグナムにエックスは驚く

「なら！明日にでも、私と手合わせ願いたいのだが！」

「本気で戦うのかい？」

「いやそういう訳ではない、だがしかし」

「なら僕が明日、丁度よさそうな物を用意しておくよ」

「そうか、助かるエックス。なら明日、楽しみにしているぞ」

そっいつてやたらいい笑顔で部屋に戻るシグナムの後姿は、とても活気に満ち溢れて見えたエックスだった

「ふう・・・明日、いや、明日から忙しくなりそうだな」

一気に5人に増えた家族の事を考え、思わず顔が綻んでしまっエックスだった

## 第5話（後書き）

やはり展開と投稿スピードが遅いですがこれからがんばります

次回、初戦闘描写の予定

## 第6話（前書き）

遅れに遅れて申し訳ない・・・

PV数が14000越えました！感謝いたします

今回謎のオリジナル展開や設定があるので要注意です

## 第6話

ある朝、掃除を終えたエックスが今居るのは、八神家の庭だった。他の家に比べて広く、彼の手入れも行き届いているため小奇麗である。

その庭の真ん中に立つエックスの手には、一本の木刀。エックスは目を閉じて、ある人物を待っていた。

「待たせたな」

その声を聞き、エックスはゆっくりと目を開け、声の主を見据えた。

「いや、僕も今来た所さ。シグナム」

視線の先に立っていたのは烈火の将ことシグナムだった。此方も手には木刀が握られていた。

「お前は何時もそう言っな」

「ふふっ、そうだね」

「ふっ……ではそろそろ」

「始めるか」

「始めようか」

その言葉を皮切りに、2人は木刀を構え、相対した。

事の始まりは4人の守護騎士達が新しく家族になった次の日の朝だった。

前の晩の約束という事でシグナムと戦う（といっても試合の様なものであるが）ことになったエックスだったが、急な約束だったため準備が整わず、急遽エックスが自前で木材から直接木刀を削り出した。

74

そして朝食後休憩を取った後にようやく戦いが実現したのだが・・・

「くっ・・・！」

「何故此方に切り込んで来ない！エックス！！」

その様子はシグナムの攻撃をひたすらいなし続けるエックスという妙な状態になってしまっていたその原因はと言うと、

「まさか私の見た目が人間だから斬れない、とでも言うのか！？私達ヴォルケンリッターは闇の書のプログラムといただろう！」

「いや、分かっているんだ。でも・・・」

「でも、ではない！分かっているなら私に斬り付けてこい！エックス！！」

やはりというか、心優しい性格であるエックスは遠慮はいらないと言われたものの、シグナムを傷つけてしまいかもしれない事に抵抗を感じていた

結局この日はシグナムの気が済むまで続けられ、昼食時になってもまだ続けていたため、他の4人からストップがかかりようやく終了となった

そして、不完全燃焼という形となり、露骨に不満そうな表情のシグナムからこれでもかと睨まれ続けたエックスは、次の日からはキチンと戦う事を約束し、現在に至る

時は戻って、

「はあっ！」

踏み込んで上から袈裟斬りを仕掛けるシグナム

「せいっ！」

エックスはそれを受け流しつつ、そのまま回って薙ぐように斬りつける

「…ふっ！」

しかし見切っていたのかシグナムはすぐさま後ろに下がって避けた

「やはりやるな、エックス！」

「そつちこそ！」

再び両者の距離が空き、それぞれ構え直す

そのまま暫くお互いに動かず、そして

「「……おおおおっ！！！」」

2人同時に駆け出した次の瞬間には、もう勝負が決まっていた

「……！」

「僕の勝ちだ」

エックスがシグナムの木刀を弾き飛ばし、自分の木刀の切っ先を向けている

今日の勝負は、エックスの勝利という形で終わった

「やはり強いな、エックスは」

額の汗をタオルで拭いながらシグナムが言う

「そついつ君だつて強いさ」

言いながらエックスは水の入ったペットボトルを渡す

「はい」

「む、すまんな」

レプリロイドのエックスは特に水分補給は必要ないのだが、自分もペットボトルを開けて飲む

「ふう、やっぱりこの水は美味しいな」

人間と同じように食べ物を楽しむようになってからというもの、市販のミネラルウォーターでさえ賞賛しているエックス

「そついえばレプリロイドというのは、種類という物があると言っていたな？」

「うん、そうだね。例えば人間の代わりに仕事をする情報処理用や運搬用のレプリロイドもいる」

「ふむ……なら、お前はどつなんだ？」

何気無くシグナムは訊いたつもりだつたのだろう

「……僕は戦闘用のレプリロイドさ。これまでも、同じレプリロイド達と戦い、倒してきた……」

エックスはほんの僅かに悲しい面持ちでそつ答えた

「・・・すまん、不躰だった」

「そんな謝らなくてもいいさ。君にそんなつもりが無かったのはちやんと分かってる」

「そ、そうか・・・」

水を飲み終えたエックスは立ち上がり

「さ、そろそろ朝ご飯の時間だ。僕は準備があるから・・・」

「む、もうそんな時間だったか。今日も付き合ってくれた事、礼を言おう」

「ふふ、じゃあ行ってくるね」

「ああ」

台所に来たエックスが早速今日の朝食の準備に取り掛かってから数分後シャマルがリビングへとやって来た

「おはよう。シャマル」

「あ、エックスくん。おはよう」

いつものように挨拶を交わす

「それにしても、毎日朝ご飯作るなんて大変じゃない？」

「そうでもないさ。僕は疲れないし、何より皆が喜んでくれるのが嬉しいからね」

「いつもありがとうね、エックスくん。・・・そうだ！何なら作るの手伝ってもいいかしら？」

「いいのかい？なら、お願いしようかな」

こうして2人で準備を進め、出来る頃にはヴィータ、ザフィーラ、そしてはやての3人、そしてシグナムも着替え終わった様子でリビングにやって来た

「ヴィータ、ザフィーラ、はやて。皆おはよう」

「おはようさん、エックス」

「おはよう・・・ねみい」

「おはよう、エックス」

「今ご飯が出来たところさ、皆座ろつか」

テーブルに朝食が並べられ、それぞれがいつもの席に着く

「……………いただきます……………」

そしていつものように手を合わせる、いつもの朝

ただ違っていたのは

「そうそう、今日の朝食はエックスくんと私で作ったの」

と、シャマルが言った途端

「……何イツ!?!」「……」

「?」

発言者であるシャマルと、エックスを除く4人がいきなり声を合わせて慄いた。その様子にエックスは首を傾げる

そんなエックスをよそに4人は未だ恐れおののくといった表情である

「で、でもエックスと一緒に作ったなら……」

「だ、だな」

「せやな」

「……うむ」

ようやく落ち着いて食べ始める4人

エックスも頭上には?マークでも付いていそうな表情のままとりあえず食べる

「・・・うん、今回もうまくできたかな」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

朝食を終え食器を片付けるエックス

ここまでもまたいつもの風景だったのだが

「あ、そうそう今日は私が作ったデザートがあるの」

おそらく1人で作ったのであろう。シャマルがその入った皿を持ってきた。6人分。

エックスは素直に喜んだ

後の4人はとんでもないラスボスが来た、といった感じの酷く生氣の失せた顔をしていたとか

暫くした後、エックスは1人町を歩いていた  
買い物頼まれたのである

あのシャマル特製デザートを皆がそれぞれ食べてから、はやてとヴ  
イータは2人してソファアに死んだように横になり、意識を保って

いたシグナムとザフィーラは何ともなさそうなエックスを不思議がっていた

「お前・・・平気なのか？」

「え？平気も何も・・・」

「・・・アレを食べて平気でいられるのが俺は不思議で仕方がないのだが・・・」

「そうかい？・・・でも、人の作った料理にアレなんていうものじゃないと思うよ」

真面目な顔でエックスは言う  
2人はそんなエックスを見る

「シャマルが頑張って作ってくれたんだ。人の真心を無碍にするのはよくないよ。寧ろ感謝しなくちゃね」

「・・・むう」

「・・・そうだな」

若干説教じみたエックスの発言だった

「ううう・・・ありがと、エックスくん・・・次は頑張ります・・・」

「・・・本人にも聞こえていたようである」

エックスが向かうのはいつも行くスーパーであった。ヴィータと一緒に行った時はアイスを買ってあげたりするんだけど、と思ったエックスだが、生憎今は家でまだ寝て（？）いるため、ここにはいない

「仕方ないか」

と呟くエックス

今は信号待ちをされていて、隣には紫色の髪をした大人しい印象の少女が同じく待っていた

すると

キキイイイイ！！

「！！」

突如信号下を通過しようとしていた車がブレーキ音を轟かせながらこちらに迫って来る！

突然の出来事に隣に立っていた少女は呆然とした様子で動かない

少々荒っぽいと思ったが、エックスは迅速に行動した

「……」めんね!」

「きゃ!?!」

手早く少女を抱えると、エックスは一時的に自分の脚部だけを“本来の”姿へと変化させ、レプリロイドの瞬発力を利用し素早く横に跳んで車から逃れる

2人にぶつからなかった車はそのまま進み、少し離れた所で歩道に乗り上げてようやく停止した

「ふう……」

念のため安全を確認した後、エックスは少女をゆっくりと降ろす

「君、怪我はない?」

「え、は、はい!」

その答えを聞き、安心したように微笑む

「そうか……よかった」

微笑みかけられた少女は思わず顔が少し赤くなりつつも真っ直ぐエックスを見る

「あの……助けてくれてありがとうございます」

「大したことじゃないさ」

頭を下げる少女にエックスはやや困ったような顔になる

「じゃあ僕は用事があるから、これで」

そう言って出発しようとしたエックスに声が掛かる

「あ、あの！あなたの名前は・・・」

少女の問いに振り返り、柔らかな表情で答える

「僕の名前はエックスというんだ」

もう一度小さく微笑み、遅れを取り戻すためか、エックスはスーパーの方に向かって走り出した

その後ろ姿が見えなくなるまで、少女はぼんやりと見つめていた

「・・・ちっ」「」

だが、黒い2人の人影が何処かからエックスの後ろ姿を忌々しそうに睨み付けていた

先の事故もあつてか、買い物から帰ってくる頃には辺りが薄暗くなつてしまつていた

というのも、スーパーから帰る道の途中、車の運転手がこの上なく申し訳ないといった顔で何度も頭を下げてきたのだ。ついさっきまで運転手が謝つていた少女は付き人と思しき人と一緒に帰宅したらしい。そして、もう一方のエックスを探しているところにはったり会つてしまった。もう謝らなくてもいいから、と納得させるのに骨が折れたエックスだが、同時に運転手の真摯な態度と事件の状況を振り返り、何か第三者の悪意を感じ取つていた

(あの女の子を狙つていたのが、それとも・・・)

其処まで考えたエックスだが、ふと顔を上げるともう八神家の目の前に立つていたことに気付く

あの子にも怪我はなかったことだからまあいいか、と思考を切り上げて玄関のドアを開ける

「ただいま」

「あ、お帰りエックス。買い物ありがとなあ」

「お帰り、エックス。遅かったな」

「遅えぞエックス！」

「お帰りなさいエックスくん。」

「うむ、お帰りエックス」

5人の家族に迎えられ、エックスは幸せそうに微笑んでドアを閉めた

今日もまた幸福な毎日が続く

だが、運命は静かに、そして確実に近づいていた

## 第6話（後書き）

次は何時になるか分かりませんが細々とがんばっていくつもりです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0102x/>

---

青き英雄と異世界譚

2011年12月15日00時45分発行